

## 〔報 告〕

## 保健室から現代の学校・社会を問い直す

—保健室登校生徒にかかわり見えてきたもの—

石若 俊子\*

A Redefinition of Modern Society and School from  
a Yogo Teacher's Perspective

—Some Findings Drawn from Students who Stay in School Health room—

Toshiko ISHIWAKA

## 摘要

「保健室登校は治るのか？」と言われ久しいが、学校と家庭が連携を取りながら、生徒に対し適切な対応をすることで保健室登校から教室へ復帰するケースが確認されている。いつの時代も社会と学校の影響を大きく受ける子どもたちは今、保健室に救いを求めている。保護者と学校、社会を繋ぐミドルリーダー（中間管理職）として、養護教諭がかかわったことからある壁（保健室登校した生徒が、再び教室へ復帰するために調整する際に発生する様々な困難や障壁といったもの）が見えてきた。有能なコーディネーターが存在したならば、この壁を打破し保健室から教室へ復帰させることも可能になると考える。次に挙げた5人の事例を通して、どのような対策で教室復帰ができたか、そして、もう一步すすめたものとして『望ましい対応の在り方』や『予防的対応』についても迫ってみたい。

**キーワード**：保健室登校、教室復帰、連携の問題点、コーディネーター、学校・社会の壁

**Keywords**：Stay in school health room, Return to the classroom, Problems of teachers teamwork, Coordinator, A wall of the systems of school and society

## はじめに

不登校やいじめから保健室登校をするようになった生徒を教室復帰させるためには、様々な障壁があり、それを一つ一つ解決するためには、大変な努力があった。その壁となるものは何なのか、またその壁を取り除くためには何をしなければならないのかを探っていくことで、保健室としての機能や有効な手だてが見えてきた。そのかかわり方を見出すことは、ひいては不登校や保健室登校を未然に予防することにも繋がるかと筆者は考えている。

## 1 不登校

昭和30年代前半から出現したいわゆる『学校恐怖症』は、時代や社会の変化に伴い今後、さらに増加すると言われ、50年を経過しようとしている。文部科学省のデータでは平成3年の不登校の人数は、小中で約7万5千人、平成18年は12万5千人と約1.6倍である。不登校の定義も昭和58年、平成4年に転換され「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況に

あること（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）をいう」とされた。

身体が無意識のうちに訴えるケースがあることを「身体的」として提示するとともに、登校拒否が個人の心理や情緒にのみ要因があるのではなく、学校や家庭、地域の様々な要因が複雑に絡み合っている場合があることを「社会的」という文言で明らかにしていると松田1997<sup>(1)</sup>は述べている。

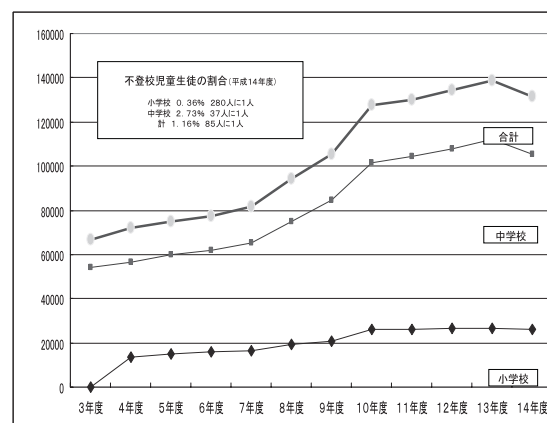


図1 不登校児童生徒の推移（文部科学省調べ 2009）

\* 富山大学人間発達科学部附属中学校

## 2 保健室登校

- ① 保健室登校は全国的な実態としては平成3年度の日  
本学校保健会の調査によると小学校23校(7.1%), 中  
学校75校(23.2%), 高校26校(8.1%)ということである。  
各校とも1例が大半を占めるが, 中学校においては3  
例以上という学校が全体の約11%を占めているのが特  
徴である。

保健室登校は子どものニーズに沿って始められ, 学  
習権の保障, 学校全体で対応すべき課題であり, 時  
代のニーズに伴い養護教諭が寄り添い対応している。  
その後から社会がついてきていると岡田2009<sup>(2)</sup>はと  
らえている。また, 子供の体と心に生じている現象(子  
どもの課題)は学校や社会のさまざまな歪のしわ寄せ  
ではないか, 保健室での課題は現代社会への問いかけ  
ではないかとも述べている。筆者自身はその歪みを正  
すことが, 保健室登校生徒を教室復帰させ, さらに予  
防的対応へと発展させることができると考えている。

## 3 保健室が果たす役割(保健室の課題) ・・・社会への問いかけ

保健室は閉じられた癒し, 受容, 共感の場ではなく,  
現代の学校・社会を問い直し, 発信する開かれた場でな  
くなくてはならないと岡田<sup>(2)</sup>は考えている。そのためにも  
養護教諭が行う健康相談活動は児童生徒の様々な訴えに  
対し, 常に心的な要因やその背景に存在するものを念頭  
におきながら執務し, 問題解決のために関係者との連携  
をとるなどして心と体の両面に働きかけている。しかし,  
この相談活動がスムーズに進まないことや関係者との連  
携がうまくいかないことが, 児童生徒が抱える問題解決  
を滞らせ, 生徒がしわ寄せを受けることになると考える。

真仁田2000<sup>(3)</sup>は『学校カウンセリング その方法と  
実践』の中で次のように述べている。「学校カウンセ  
リングの発想は, どの児童・生徒にもよりよい成長を期待  
する心があると捉え, その心に働きかけようすることに  
は, 本質があると考えるのだが, そのことにおいて教育  
の本質と全く軌を一にするものであるとみている。とこ  
ろが, 教育現場においては, 必ずしもそのような受け止  
め方はされていない節がある。」と認知にずれがあるこ  
とを指摘している。

実際, 学校現場では担任や学年, 他教職員の無理解か  
ら生徒を無条件で受容できず, 家庭と対立しているケー  
スもあり, 最終的には生徒が犠牲になり, 引きこもらざ  
るを得ない状態である。自ら生徒が保健室の戸を叩くか,  
保護者からスクールカウンセラーが保健室へ依頼してく  
ることから引き受けている状態である。そのため養護教諭が  
コーディネーターとして, 不登校や保健室登校生徒にか  
かわり, 生徒が教室復帰することを目標として, 各関係  
者がお互いの壁を低くしたことで連携を可能にし, 目標

を達成している。このような連携を阻む潜在的な学校文  
化について迫ることで逆に不登校や保健室登校にまで至  
らない, つまり, 予防的対応にも発展するものと考え,  
ここに提示した。

### I 目的

保健室登校生徒の対応において, 連携を阻む原因は何  
なのか, 5例の生徒を挙げて比較し検討した。

### II 方法

過去18年間に渡り不登校や保健室等の生徒20数名とか  
かわってきた事例から, 5例挙げて検討した。中でも事  
例1は, 筆者がかかわり方について確立しはじめた頃の  
生徒であり, 後の4例は最近の事例である。

### III 結果

#### 1 要因別一覧

登校拒否の要因として 笹島・酒井氏<sup>(4)</sup>らは

- 1 教師との関係
  - 2 友達との関係
  - 3 学業との関係の3点を挙げている。(1989年)
- 5例の保健室登校生徒をこの3点の要因別に分類して  
みると下記ようになる。

保健室登校生徒一覧表 1

事例	保健室登校期間	要因	現在の状況
1	H〇. 4 ~ H〇. 7	2 + 1	25才
2	H〇〇. 9 ~ H〇〇.3	2, 3 + 1	高校2年
3	H〇〇. 9 ~ H〇〇.1	2 + 1	高校1年
4	H〇〇. 1 ~ H〇〇.3	2 + 1	中学3年
5	H〇〇.12 ~ H〇〇.3	2 + 1	高校1年

※ +とは当初要因ではないと思われていたが, 結果的  
に付け加わってきた要因である。

#### 2 各事例の概要と指導過程

- 事例1は平成3年, 各学校にも少しずつ不登校生徒  
が出現してきた頃のものである。生徒理解がなかなか  
進展しなかった時期でもあり, コーディネーターとし  
てかかわった筆者も, 全職員の無理解さから閉口した。

##### 1) 【事例1・・・教室に入れないR子】<sup>(5)</sup>

小学1年 R子(一人っ子) 両親の3人家族

##### ① 要約

R子は, 入学説明会に参加していなかったこともあり,  
入学式当日は一人だけ, 制服ではなかった。そんなこと  
もあってか, 翌日から登校を渋った。R子は就学前まで  
は母親と二人だけで生活し, 入学を契機に父親と住むこ  
とになった。そのためか, 他児童とかかわる事も苦手だ  
ったり, 父が不在だったことから, 男性に対する不安感も  
強かったりした。生徒理解が円滑にいかなかったことも

あり、学校と家庭との調整がうまくいけなくなり、養護教諭がコーディネーターとしてかかわった。運動会では几帳面でがんばりやの性格がみんなに受け入れられ、R子の自己肯定感を高めるチャンスにもなった。その後、いろんな活動に参加し、能力を発揮できるようになった頃には、母親の付き添いがなくても登校可能になり、完全復帰した。

## ② アセスメント

担任や学年は生徒の現状を理解できずにいることから保護者に対してうまく対応できなかった。

### ア 生徒理解

- ・ 「R子はなぜこうなった」と家庭の責任だけを追究するのではなく、無条件の受容を心がける必要がある。

- ・ 教室におけるR子の心の支え

### イ 学校内での円滑な協力体制

- ・ 担任はR子の母親代わりとして対応することで教室での活動が円滑に進む。
- ・ 学年はもとより全職員がR子と廊下ですれ違った時や清掃時等で困っていたり頑張っていたりする時に声をかけてやることで不安は解消される。

### ウ 家庭の協力

- ・ 毎日、欠席しないように生活習慣を確立してもらう。
- ・ 母は毎朝、R子の登校に付き添い、授業中には教室にいてもらうことで授業に参加させる。

## ③ 目標

- ・ 家庭の協力を得ながら人とのかかわる事の楽しさや活動することの喜びを味わわせることで、R子の意欲が湧き、教室復帰を目指す。

## ④ 指導過程

### ア 【養護教諭の対応】

- ・ 全体の流れを把握し、コーディネーター役を務めた。なかなか円滑に生徒理解がされないことからカウンセリング研修会や資料等を配布して、意識改革をした。下記の譜は、まさにR子そのものであることも職員に提示した。

朝顔の蔓が、夜の雨に打たれて、泥だらけに横たわっています。ほらだめじゃないの。ちゃんと立ちなさい。しっかりつかまりなさい。急いで強く引っ張られて、せっかくの蔓の芽は傷つきちぎれてしまう。……しかし、朝顔もうちに力を秘めています。……その朝顔に、屋根の高さにまで届く支え木が静かに黙ってより添いました。……そして、それなりの大きさの、それなりの形のそして、それなりの色の花をいっぱい咲かせました。やがて、実もつきました。

— 養護教諭の実践譜より —

- ・ 入学式の翌日から玄関で泣くので、「保健室で折り紙でも折ってみる？」と声をかけたところ、即座

に応じてくれて、2週間ほど保健室登校をした。  
＜R子が教室へ行こうと思うきっかけとなった会話＞

T：筆者の発言 R：R子の発言

T 1：Rちゃん折り紙を折るの上手だね。とってもきれいに折れているし、それにいろんな折り方も知っているしね。すごいね！

R 1：うん、いつもお母さんと折っているから

T 2：そうなんだ！Rちゃん、じゃ、いろんな折り方はお母さんから教えてもらったのかな？

R 2：うん！

T 3：じゃ、お母さんもきっと、折り紙得意なんだね・・・保健室の黒板に貼っておこうね。みんな教えて欲しいって言うね。

R 3：こんな物・・・

T 4：とんでもない。こんなすてきなのに！教室のみんなにも見せたいね。きっとびっくりするね。

R 4：ええっ？・・・びっくりするかな？

T 5：教室のみんなもこの折り方、教えて欲しいって言うかもしれないね。

この会話後、彼女のなかで教室へ行こうと思う気持ちが芽生え、母親が付き添って授業を受けることができるようになった。

- ・ 常に彼女がおかれている立場を考えながら、どんな対策を取ったらよいかを担任や学年、全職員に示しながら、最終的には学年で動けるような見極めができた頃には徐々に退いていった。

### イ 【担任の対応】

- ・ 担任は女性だったことが幸いし、全面的にR子に寄り添うことで心の安定を図った。
- ・ R子との信頼関係を徐々に築きながら、最終的には母親と養護教諭からバトンタッチできるような体制を図った。(運動会の練習は、担任が全体指導をするため、養護教諭が付き添って参加させ、担任にはどのようなかわり方がR子によいかを実際に示した。これは学年や全職員には生のカウンセリング研修となったようだ)
- ・ 完全復帰まで、教室の席は相性のよい女の子か、優しい男子にしたり、入りやすく入り口付近にしたりして環境を整えた。
- ・ 人前で話をする状況に置かれたときは、教師が寄り添うようにして気持ちを言葉にしてやる。(リフレーミング)

### ウ 【保護者の対応】

- ・ 家庭を非難することをやめ、R子が教室へ復帰できることを共通の課題として、関係者が一丸となって対応にあたった。この時、保護者には問題解決のための援助チーム者として加わってもらう事で連携が円滑に進んだ。(図2)

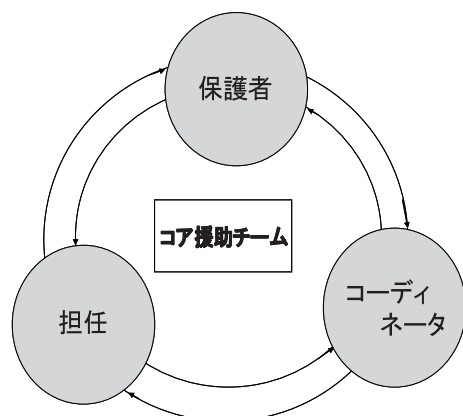


図2 コア支援チーム

(石隈・田村のコア援助チームでの保護者の位置づけを一改変) 2007<sup>(6)</sup>

- ・ 生活習慣を整え、毎日欠席をしないためにはどうしたらよいかを示しながら、協力をお願いした。
- ・ 毎日、母は教室までR子に同伴し、昼食時には母一人が帰宅するという方法を夏休み頃まで継続してもらった。

#### ⑤ 結果・結論

#### 《事例1での弊害とは》

##### ① 生徒を無条件で受容できない

単にR子はわがままな子で、早く思春期が来て男性を意識しすぎている生徒ではないか。こんな育て方をした母親が悪いとか育った環境が悪いと非難され、一歩進んだ対応がとれなかった。

##### ② 学校内での円滑な体制がとれない

- ・ 誤った育て方をされた生徒に対しなぜ、学校側はこのような苦勞をしないといけないのか。
- ・ R子を一人だけ特別扱いをすることは他児童への影響が考えられる。
- ・ 担任は一人のためにいるのではない。一人のためにみんなを犠牲にできないと全く協力体制がとれない。

##### ③ 家庭と学校が背会わせ状態

学校は母への躰の悪さを攻めたことから、学校へも顔を出されなくなり、代わりに父が送ってこられるようになって、さらに連携がとれなくなっていった。



R子は欠席するようになった。

#### <その対策>

- ① 養護教諭は入学式の翌日から、かかわったという経緯からコーディネーター役を引き受け、学校の体制づくりをした。
  - ・ 生徒の無条件理解
  - ・ 担任の果たす役割
  - ・ 全職員で共通理解
- ② 保護者に対しては協力者としてお願いをした。

R子が一番安定するのは母親とともにいる時であった。登校し友達とかかわる事が楽しいとか喜ばしいとか思えるためにも休まないで登校することが第一であった。それが現実となるためには、保護者の協力は不可欠であった。

<母に付き添いをお願いしている会話>

T：筆者の発言 母：R子の母の発言

T1：Rちゃんはとても几帳面でがんばりやで、おそらくお母さんが教室へ付き添っていただくと授業を受けることができますと思いますよ。幸い、お母さんもおうちにいらっしゃる方なので・・・毎日、大変でしょうがなんとか協力して頂けないでしょうか。

母1：私は大丈夫ですが・・・

T2：協力して頂けますか？Rちゃんは勉強が大好きですからきっと伸びると思いますよ。

母2：そうですか？ じゃわかりました。やってみます。

T3：お母さん、ありがとうございます。

この会話の翌日から、毎日、母と集団登校するようになった。

○ 事例2は、いじめを受けてとてもつらい気持ちを周囲が理解してくれないし、対応してもらえなくて不登校傾向になった。しかし、現状を打開したいと考えた本人が自ら保健室登校を願い出てきた例である。

#### 2) 【事例2・・・いじめを理解してもらえないことから登校してこなくなったI男】

中学2年（一人っ子） 両親の3人家族

##### ① 要約

- ・ 中学1年生の時は欠席が多く、中学2年生9月、運動会も終わった頃に、鞆を持ったI男が保健室入り口に立ち「保健室にいさせて下さい」と自ら懇願した。当初は担任から「全くやる気がなく、テスト類も嘘八百書くいい加減な生徒」と聞いていたことから、いかにやる気を出させるかが問題であると考えていた。

<保健室登校を願い出て来た時の会話>

T：筆者の発言 I：I男の発言

T1：これから毎日何するね。今日は何する？

I1：漫画を持ってきました。

T2：そう・・・いいね。今したいことがあるっていいね。読みたい漫画を持ってきたもいいから毎日休まず出てこられるかな。

I2：たぶん・・・

T3：うれしいね。休まず出てくるのが今のI君にとって一番やって欲しいことだからね？

I3：はい

I男とは初対面であったが、明らかに顔の表情からも意欲が消失していることは見て取れた。細身で長身



の体には、不釣り合いな目と目の開き具合がとても気にかかった。しかし、その後、行動が活発になるにつれ顔の表情も変わり、目もきりりとした好青年に変身していった。ユーモラスな性格は多くの生徒に受け入れられていった。

- ・ I男は翌日、漫画を鞆いっぱい詰め込んで、登校してきた。そして1日中漫画を見ていた。担任からは「やる気のない子」とレッテルを貼られていたが、好きなことは頑張ることができた。これを機会に、保健室に遊びに来てくれる級友と会話をしたり、トランプをしたりして、ほぼ一日過ごすことができるようになった。
- ・ 保健室で中学1年の数学から始めたところ、授業へ出る意欲も出てきた。まずは、4教科から始めた。その後、教科を増やしたり、合唱コンクールにも出たりしたことが彼の力となり、中学3年生には見事教室へ復帰することができた。

## ② アセスメント

### ア 生徒理解

朝、登校しても級友から嫌なことをされ、直ちに帰宅を繰り返していたことをしっかり担任や学年は理解し、I男の心に沿いながら彼の本質を把握するように努力する。

### イ 学校内での円滑な協力体制

- ・ 毎日給食を運んだり、サポートしてくれたりする生徒を足がかりとして、教室への距離を縮める努力をする。
- ・ 担任はI男との心の隔てを取る努力をする。
- ・ 1学年からの学習の保障を行う。
- ・ 保護者の思いを組んだ対応をする。

### ウ 家庭の協力

- ・ 毎日欠席することのないように、生活リズムの確立を図ってもらった。
- ・ 夕食は心のこもった手作り料理でI男の心の安定を図ってもらった。

## ③ 目標

- ・ 中学1年生から欠席気味だったため、彼のよさを他生徒に知られることもなく、彼もまた、学校生活の楽しさを知らないで今日に至っていた。まずは毎日登校することから始め、体のリズムを作りながら学習を進め、信頼できる友人を得て、3学年には教室へ完全復帰させる。

## ④ 指導過程

### 【養護教諭の対応】

- ・ 担任や学年、保護者とのコーディネーターとして調整を図った。
- ・ 学校での生活リズムを作るために、時間割を立てさせ、1日過ごすことができるように働きかけた。
- ・ 小集団で人とかかわることを学んでから大集団へ復帰させた。

### 【担任の対応】

- ・ I男との心の隔てを除去するためにも、微細な成長を掴んでもらい、彼の良さを理解するように努力した。なかなか当初は理解できずにいた担任も、休まず登校してきたり、1日中保健室で学習や活動したりするI男の変容ぶりに、徐々に対応にも変化が出はじめた。

### 【母親の対応】

- ・ I男が毎日休まず登校していることや意欲的に活動していることを学年が認めていることやI男が頑張っていることを伝えることで、母の心が安定し、さらなる協力を得ることができた。
- ・ 生活習慣の確立は全てに生きていることや朝食を食べてきた日とそうでない日の彼の意欲の違いを伝えたり、食事こそが母親として息子に伝えられる唯一の愛情表現であることを理解して頂いたりした。日々の食事の在り方を伝えたことが母の実践意欲を駆り立て、さらにI男は顔の色も良くなり、元気を出せるようになっていった。

## ④ 結果・結論

### 《例2での弊害とは》

- ① いじめを理解してもらえない。  
登校した途端に筆入れから文房具を取り上げられるため、勝手に早退していたが、「いじめ」と理解されず全く対応してもらえなかった。
- ② 学校内での円滑な体制がとれない。  
生徒への理解が変わらないことから、担任や学年とI男について連携を取ろうとするが、袋小路状態であった。
- ③ 両親と担任・学年の意見が平行線を辿っている。  
両親が「いじめ」を理解してもらおうと担任や学年主任と面接を繰り返すが不可能状態であった。



不登校状態になった。幸いI男本人が保健室登校を願い出てきた。

### <その対策>

- ① 生活改善をしたことで意欲を  
毎日I男が欠席をしないで、登校できたり、中学1年からの数学を始めたりしたことで、担任や学年の認識が変化し、I男への理解も前向きになっていった。
  - ② 早い段階で授業参加を  
学習を始めたことで、理解ある教科担任の授業にも出ようという意識が芽生えてきた。さらに、教科数を増やし、全教科の授業が受けられるようになっていった。
  - ③ 母の協力  
食事改善されたことで顔色も良くなり、全ての点において好感度が増していった。
- 事例3はやや肥満傾向で、自分自身何となくみんな

から邪見にされていることを感じていた時に、合唱に向けての練習中、友達の心ない言葉を受け傷ついたらしく休みがちになった。その後、自ら保健室登校を望んできた。

### 3) 【事例3・・・合唱練習で級友とトラブルになり保健室登校をはじめたT子】

中学2年（双子の姉妹） 両親、姉社会人、弟（小学生）  
祖父母の8人家族

#### ① 要約

- 9月中旬頃、本児が自ら「今日は保健室にいさせて欲しい」と来室してきた。状況もわからないまま対応していたが、ある生徒の心ない言葉に傷ついたことがきっかけだったことが、後で判明した。T子は毎日登校し、差し障りのない授業には出たり、学習面でも自信をつけてくると、保健室登校生徒とも人間関係で問題が発生したりした。保健室でのトラブルで、やめて欲しいことを相手にしっかり伝えられたことはT子にとっては大きな成長と言えた。小集団で学んだことが教室復帰に向けての原動力となり、教室復帰を遂げることができた事例である。学年が変わるときに復帰を目指していたが、この時点（2月上旬）で復帰させた。

#### ② アセスメント

##### ア 生徒理解

- T子は胸の内を語らず、当初は状況がつかめないままだった。しかし教室でつらい気持ちでいたことを理解し、T子の心に沿う体制づくりをした。
- 担任はT子の心の変化に気づくこともなく見過ごしてきたことから、T子の担任への信頼は消失していたので信頼回復のため努力をした。

##### イ 学校内での円滑な協力体制

心が安定した頃から学習を始め、可能な教科を選び授業を受けさせる。（教科担任とは共通理解し、発言させることを控えてもらった）

##### ウ 家庭の協力

- T子は双子で、いつも妹が母親を占領しているところもあったようなので、心が癒えるまでは、極力T子の心の支えになるように対応してもらった。
- 母は以前、学校の講師をしていたこともあり、学習の遅れを補ってやることでT子との親子関係が深まり、成績にも現れることから協力をお願いした。

#### ③ 目標

T子は、人とかかわることを苦手としている面があるので、保健室で傷ついた心を癒しながら、保健室登校している生徒達と、うまくかかわる学習をさせた。小集団の中で人間関係について学ぶことが最終的には教室という大集団で生活するための基礎となっていくと考えた。人とかかわることの喜びや楽しさを感じとれるようになったら教室復帰させる。

#### ④ 指導過程

##### 【養護教諭の対応】

- 当初は保健室登校をするようになった経緯がわからず、困惑した。しかし心が傷ついているのだらうと保健室に居場所を作り対応した。
- 担任や学年、保護者と調整を図り、T子にとって一番望ましい体制を取った。
- 学習の保障としては、他の保健室登校生がやっている学習を自分も望み、毎日学習することで補った。受けられる授業には必ず出ることをT子と話し合い、教室とのつながりを断ち切ることなく継続することができた。
- 他の保健室登校生徒とかかわることが、教室という大きな集団へ戻るときの力となると考え、極力小集団でのかかわりを増やした。（勿論トラブルも発生し、人間関係を学ぶ機会になった）

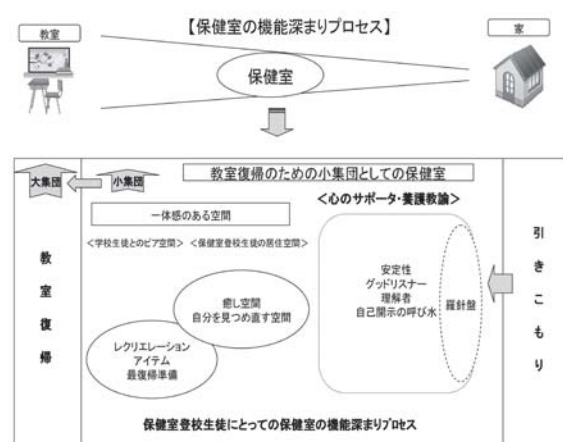


図3 保健室の意味深まりプロセス  
（岡田2009年を改変）

##### 【担任の対応】

- 担任も困惑していたが、T子の心に沿うようにかかわり、毎日学級での出来事を話したり、行事にかかわらせたりしてつながりをもたせた。

##### 【母親の対応】

- 毎日欠席しないように生活習慣を整え、家庭でのT子の心の支えとなってもらい力を蓄えることに努力してもらった。
- 学習面でも遅れている部分を補い、教室復帰に向けての準備をしていただいた。

##### 《事例3での弊害とは》

- 生徒を理解できなかった。  
担任や学年はT子のおかれている状況を汲みとる事ができない。単にわがままだろうとか甘えているのかと非難され、保健室登校自体を認めてもらえなかった。保健室にいと教室へ無理矢理連れて行かれることになってしまい、休みがちになってしまった。
- 学年内で調整がとれなかった。  
生徒の本質を見抜くことができず、いつまでも調整がとれないため、学年での対応は全く無の状態であった。

③ 家族もT子を理解できなかった。

なぜ我が子は保健室登校をするほど、窮地に立っていたのか。なぜ担任は見送ごしていたのか。と問題がすり替っていった。



T子は学校を休みがちになった。

<その対策>

① 生活習慣の確立

保健室登校でもいいから、毎日休まず登校することを約束し、保健室でリズムづくりを始めた。時間割に基づいてT子なりの時間割を毎朝立てた。

② 早い段階での授業への参加

教室以外での授業から出る準備を始めた。その教科担任との調整からなんとか実現することができ、徐々に教科数を増やしていた。

③ 自己肯定感を高める

得意としていた4教科の授業には出ることができたので、教科担任に協力を願い、T子の良い点を評価してもらい、授業を受けることの喜びを感じさせてもらった。

④ 母親の協力

失った意欲を取り戻すためにも、家庭内においても心の支えとして協力を願った。

<納得できない母に理解と協力を求める時の会話>

T：筆者の発言 母：T子の母の発言

T1：T子さんはご家庭の方ではいかがでしょうか。

母1：はい、T子がこんなことになって初めて感じているのですが・・・以前は感じなかったのですが・・・家でも一人ぼつんとしていることが多い子供だったんでしょうか？妹の方は私にいつもくっついていますが・・・T子は違いましたね。

T2：はあ・・・そうでしたか。なるほど・・・それがわかっただけでも良かったとしましょう。おそらく寂しい思いをなさっていたのかもしれないね。

母2：そうなんですか。こっちに来られといってもなかなかこない子です。

T3：T子さんは恥ずかしがり屋ですからね、自分の方からは、なかなかそんな行動はとれないと思いますね。ここはお母さんから彼女に近づき「お母さんがT子といっしょにしたいから」と伝えられるのもいいかもしれませんね。

母3：そうですか・・・

その後、母は家庭で学習をみられるようになり、T子の表情もとても明るくなって、好感が持てる生徒になっていった。T子は絵がとても上手な生徒で、美術の時間に教科担任から賞賛されるようになり、ますます力をつけていった。

○ 事例4は入学後、仲の良かった生徒とうまくいなくなってからいじめのような出来事があった。しかし担任は取り合わなかった。母親が個人的にカウンセラーを捜し、面接を受けていた。そのことを告げに来室された翌日から、保健室登校となった。

4)【事例4・・・担任との関係が悪くなり教室へ入れなくなったY子】

中学1年（一人っ子）両親、祖父母の5人家族

① 要約

・ 小学校時代は優等生で、生徒からは勿論、教師からも厚く信頼されていたようだ。中学校に入ってもその調子で学校生活を送っていたところ、入学当初仲良くしていた級友から陰で悪口を言われたり、ズックにいたずらをされたりしはじめた。そのことを担任に訴えたが、本人の行動がいじめを引き起こしたものとして取り合ってもらえなかった事から、Y子は欠席気味になった。

② アセスメント

ア 生徒理解

担任や学年がY子の気持ちを理解し、しっかりと受け止めてやる必要がある。

イ 学校内での円滑な協力体制

・ Y子の学習の保障  
・ 給食や学校行事に参加させるためにサポートをする生徒を調整する。

ウ 家庭の協力

・ 毎日、登校できるように生活習慣の確立をお願いした。  
・ Y子は一人っ子であり父親からの期待は過剰気味で、幼い頃から学習をさせていた。Y子との会話にも「勉強なんかもう、したくない」とあり、幼い頃からの父との関係が見て取れた。さらに父は、お婿さんだったことから家庭内でも母親や祖母が中心だったので、両親の絆を太く安定したものにするために協力を願った。

<両親の絆を太くしてもらうための会話>

T：筆者の発言 母：Y子の母の発言

T1：お父さんはY子さんによくかわられる方ですか？

母1：小学校の時はよく勉強を見たり、遊んでやりたりしていましたね。

T2：今は？

母2：娘の方がいやがっていますね。近寄って欲しくないと・・・

T3：そうですか。お父さんは社会の厳しさを教えてくれる人でもありますからね。どんな形だったらかかわっていただけますか。

母3：これからだったら、夫はスキーがうまいので連れて行ってもらうことはできますね。

T 4：それはいいですね。お父さんの力が発揮できる時でもありますね。どちらで滑られますか。

母 4：土日は県内ですが、春休みに2泊3日ぐらいで出かけようと思っています。スキーは夫がへそくりで買ってやっています。

T 5：ますますすばらしいですね。お父さんのいいところをY子さんに、おおいに伝えてあげてください。そして両親の絆をがっちり太いものにしていただくとY子さんの心も安定しますからね。

これを機会に父娘は学習以外で会話を時々、持つようになったと母は話す。

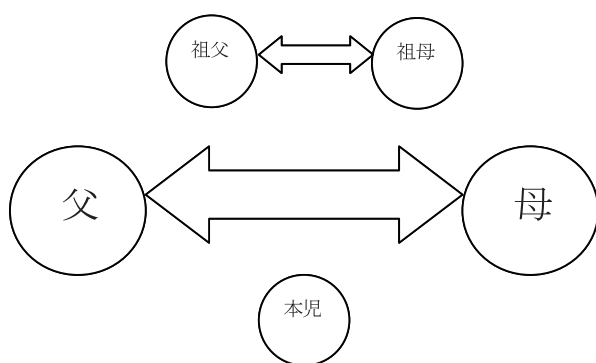


図4 安定した家族関係2004 (7)

### ③ 目標

入学当初から夏休み頃までは、楽しく学校生活を送る事ができていた。(12月中頃から意欲をなくし始めている)傷ついた心に家族や教師が寄り添うことで心の傷は癒えると考えた。保健室で学習を進めながらこじれてしまった担任との関係も修復することで、学年が変わる頃には教室復帰ができると考えた。

### ④ 指導過程

#### 【養護教諭の対応】

- ・ 担任と面接をしてY子がこのような経過を辿ようになった経緯と関係の修復を目指すための対策を立てた。特にY子が担任に対し信頼する気持ちを抱かせるためには担任としてどうしたらよいかを話し合った。
- ・ 行事は復帰に向けてのチャンスなので、サポートしてくれる生徒と行動させながら、養護教諭も見守る状態で参加させた。この体験は次へのステップとして大変、重要であった。

#### 【担任の対応】

- ・ こじれたY子との関係を修復するため、毎日保健室に来室し、様子をうかがった。そして、Y子のいいところを見つけて会話を進めた。
- ・ 信頼関係を構築した後、遅れた学習の保障として担任が数学をほぼ毎日、見ることでさらなる信頼関係を築くことにした。

#### 【母親の対応】

- ・ 両親が太い絆になるように、そして父親の存在を確かにしながらY子は心の安定を取り戻していった。母は大変、まじめにしっかりと対応される方だったので、めきめきと変容していった。休日には友達と映画を見に行ったり買い物に行ったりして、人とのかかわりを求めるようになった。子供が変容することで、さらなる協力を得られることができた。

### ⑤ 結果・結論

#### 《事例4での弊害とは》

#### ① 生徒を理解できなかった。

Y子が担任に「いじめ」と訴えたにもかかわらず、「おまえの態度はどんなんや」と逆に避難してしまったことから、担任への信頼は消失してしまった。当初からY子の気持ちをしっかりと受け止めてやればこのような事態を招くことはなかったと考える。ここが学級担任として高い壁を作ってしまう、生徒にしわ寄せがいった。

#### ② 学校内での円滑な体制がとれなかった。

夏頃からY子は友達関係で問題があると把握しているながら、対応することもなく放置していた。また、Y子の訴えについても把握することなく、状態を悪化させた。

#### ③ 保護者は担任への信頼を失っていた。

保護者はY子のわがままで学校に迷惑をかけているという思いはありながらも、担任の対応の悪さに閉口し、私費でカウンセリングを受けられた。



カウンセリングではかなり意欲を失っているといわれ、Y子も休みがちになった。

#### <その対策>

#### ① 担任との信頼関係を取り戻すことへの対応

- ・ 毎日、保健室へ来室し、信頼関係を回復するために、担任の空き時間を利用し、担当教科を丁寧に教えた。わかる喜びをもたせることが一番の信頼回復となった。そして、担任の授業に出る足がかりとした。

#### ② 学習の保障

- ・ もともと学習面では不安のない生徒だったが、遅れが気になり、授業へ出ることを不安に思った。Y子が信頼できる教科担任の授業から始め、徐々にその教科数を増やしていった。

○ 事例5は、クラスの生徒からいじめに遭い不登校になった。担任や学年主任からカウンセリングを進められ母親が何度か面接を受けた。その後、カウンセラーから保健室登校を勧められた。

#### 5) 【事例5・・・いじめから登校してこなくなったK男】



中学2年（一人っ子）、両親の3人家族

#### ① 要約

- ・ K男は当初、言葉のいじめを受けていたが、それに対し反論すると、さらなるいじめが待っていて、最終的には不登校になった。K男の場合も担任から理解されず、保護者からの申し出も受け入れられず、カウンセラーがかかわって、保健室登校することになった。もともと学習面では優れていたため学習に対する意欲は旺盛であったが、事件をきっかけに意欲を失ってしまった。しかし、最終的には授業を受けることが足がかりとなった。教科担任とのかわりや良い成績を取ることで自己肯定感を高め、3学年になる時、完全復帰できた。

#### ② アセスメント

##### ア 生徒理解

授業の前後や休憩時間にいじめが発生するとK男は訴えた。自分を守ってくれる教師はいないと考えていただけに、ことは重大であった。

- ・ 担任や学年はK男の気持ちをしっかり受け止め、信頼を取り戻す努力をする。

##### イ 校内の協力体制

学年、教科担任はK男に共感し、早い段階で授業の保障を行うためにも、授業を受ける時、十分に配慮する。

##### ウ 家庭の協力

- ・ 意欲がなくなっているため、欠席させないように車での送迎をお願いした。（登下校中のいじめを想定して）
- ・ 3人家族ではあるが、K男の心をいやす努力をして頂いた。

#### ③ 目標

教師たちが、K男を守るという姿勢を示しながら、日々の授業を受けさせることで学習面や教室での生活を断ち切ることなく継続させる事ができる。3学年になったらクラス替えをするので、その時、完全復帰させる。

#### ④ 指導過程

##### 【養護教諭の対応】

- ・ K男の気持ちをしっかりと受け止め、保健室は安全な空間であることを認識させ、保護した。
- ・ 意欲が消失していたので、得意なパソコンを使用させ、気持ちの安定を図った。
- ・ 保健室でK男をしっかりと守り、授業に出るときは教室まで送り届け、教科担任が来た時点でバトンタッチした。（休憩時間は自分で保健室へ来る）

##### 【担任の対応】

失った信頼を取り戻すためにK男を絶対保護する体制に出る必要があった。

<担任に信頼を取り戻してもらうため努力を要請している会話>

養：筆者の発言 担：K男の担任の発言

養1：先生どうでしょうね。かなりこじれているようですが・・・

担1：そうですね。

養2：これは担任が全面的に保護に回らなければならないでしょうね。私も何日かK君について教室へ行っていますが、待ちかまえていますね。あれではK君の不安は増しますね。

担2：気にしなければすむんでしょうけど・・・

養3：いや・・・先生は気にならない方だからそうかもしれないかもしれませんが・・・気の弱い生徒にしたらいやでしょう。しかも「とにかく僕に声をかけないで欲しい」といっていますね。小学校の頃からいじめに遭っていたようだから、これはまさに「トラウマ状態」でしょうね。だとすると嫌悪感でいっぱいですね。なんとかしてやらなければ・・・

担3：「トラウマ」？

養4：いじめを受けている生徒は脳の構造が変わってしまっていると言われてますから・・・脳の中の海馬と扁桃体が縮むそうです。だから嫌なことからは逃れたいのでしょう。そうなったら教室にも入らなくなりますから、早く手を打ちましょう。

この後、担任が変容し、朝学活には保健室へK男を迎えに来るようになった。

##### 【母親の対応】

- ・ 毎日車で送迎されるので、時々会話をして彼の成長を伝えることで心の安定を図り、同時にさらなる協力をお願いした。

##### 《事例5の弊害とは》

- ① 生徒を理解できなかった。  
いじめとはっきりK男が訴えているにもかかわらず、K男も対応が悪いからと取り合わなかった。
- ② 学校内での協力体制がとれなかった。  
学年内で意思が統一せず、放置状態であった。
- ③ 保護者は担任への信頼を失っていた。  
いじめた方がのうのうと授業を受けていて、なぜ、いじめられた方が不登校にならないといけないのかと母の気持ちはつらいものがあつた。

##### <その対応>

- ① 生徒理解についての共通理解(無条件の受容)  
原因は何であれ、いじめを受けた生徒を保護し、授業を受けさせる責務があることを共通理解しながら対応した。
- ② 学校内での円滑な対策  
K男のことを理解してくれる教師を増やしていくことで、参加できる授業も増えていった。

### ③ 保護者の協力

養護教諭が対応していることやK男の変容が保護者の心を変えていった。

<K男の思いを全面的に受け入れたことで母は協力になった時の会話>

T：筆者の発言      母：K男の母の発言

T 1：お母さんの思いはいかがでしょうか

母 1：いじめられた方が授業に出られないとは・・・

T 2：おっしゃるとおりですね。なんとか私たちも1教科でも多くの授業に出て欲しいので、休み時間は保健室で待機し、授業が始まると、私がついて教室まで行きます。教科担任が来るまでいますよ。授業が終わると同時に、彼は一人で保健室へ戻ってきます。

母 2：先生にそんな迷惑をかけているんですか・・・ありがとうございます。

T 3：いえいえ、お母さんの気持ちを考えると当然のことです。彼はもともと勉強が好きですからね。頑張ってもらいたいです。

母 3：ありがとうございます。

T 4：ですから、欠席だけはしないで欲しいのです。登下校中にいじめられると困るので、大変でしょうが、送り迎えをお願いしたいのですが。

母 4：わかりました。

母は毎日車で送迎され、休みがちになるK男の心を支えられ、毎日登校できるようになった。

## IV 考 察

子どもたちの体と心に起きている現象は、『学校、さらには社会の様々な事情や歪みのしわよせではないか』と岡田2009<sup>(2)</sup>が考えているように、5例の生徒にも共通したものを感じた。「教育の本質」に迫ることは、社会の高く厚い壁を取り除くことを可能にすると考える。

### 1 事例から見てきた対応の共通点

#### ① 研修を積んだコーディネーターの存在

##### ア 五感を磨く

生徒の微妙な心の変化や動作の変化を読み取ることができる。そして、気持ちを代弁してやれることが大切である。(リフレーミング)

##### イ 哲学的要素が要求される

関係者と連携を取る時、心に葛藤を抱かないとか、壁を作らないような人格者で、関係者の気持ちに添った対応が要求される。

国分<sup>(8)</sup>が教育カウンセラー(ここではコーディネーターととらえた)は、実践・指導・研究・マネジメントの4つの局面があり、いずれもが、哲学なしには介入の方針を定められない性質のものだと述べている。

##### ウ 保護者と信頼関係を保つ

保護者の気持ちに添いながら、保護者もスタッフの一員であるとした考え方にに基づき、連携を円滑にとらなければならない。

### ② 学校全体の協力体制の確立

#### ア 生徒理解

- ・ 学級や学年の壁を低くする。さらに一歩進めた対応として壁を作らない。そして、多くの人の意見に耳を傾ける姿勢が必要である。
- ・ 保健室登校生徒への無条件の肯定的配慮・受容が深まることで、生徒は心を開き自然に行動にも変化が現れる。

#### イ 友人のサポート

- ・ 教室復帰をめざすためには数人のサポートが必要になってくる。昼食をともに食べたりゲームをしたりして小集団の中での人間関係づくりをする。

#### ウ 学習の保障

- ・ 生徒の気持ちがいろんな活動に対して意欲的になってきたら、徐々に学習に取り組みさせていく。そして、生徒のつまづきの大きい教科から始め、不登校になった以前までさかのぼり、無理のない形でさせていく。

### ③ 家庭の協力

#### ア 生活リズムを作る

生活習慣の立て直しをし、欠席をさせない努力をする。

#### イ 家族関係の構築

- ・ 家族が一丸となって子供を支える。
- ・ 愛情のこもった・手作り料理で元気を出させる。

### ④ 受容の場・リハビリとしてのとしての保健室

- ・ 心が落ち着く空間であること
- ・ 初期対応としては、原因はどうであれ「無条件の受容」で対応する。

- ・ 信頼関係ができた頃から徐々に活動させていく。

(卓球やトランプ、折り紙等と増やしていく)

- ・ 学習はつまづきの箇所から始める。信頼できる教師や共感してくれる教師に協力を得て、かかわってくれる人を増やしていく。

### 2 阻むことの共通点

#### ① 生徒理解

- ・ 生徒を十分に理解できないことから、甘えているとかわがまとかで処理されてしまっている。
- ・ いじめについては、いじめる側も悪いがいじめを受ける方にも何らかの原因がある。といった考え方が根底にあり、どこまでも平行線を辿っている。
- ・ 負けを認めることへの抵抗感を強く感じた。

#### ② 円滑な体制ができない

学校内や学年で共通理解されない、体制づくりができない

#### ③ 学校と家庭が連携できない

お互いが自分の言い分だけを述べる。

### 3 各事例の「個性」から学ぶもの

- ① かなり前だったが、「なぜ学校があるのか？」と数人の生徒から聞かれたことがあった。しかし、その当時、これに対して良い回答を持ち合わせていなかった。しかし、この事例の生徒たちとかかわったことで見えてきたものがあった。おそらく学校という器の中で集団生活を学び、社会という大きな器へ出て行くための「訓練の場」であろうかという考え方に行き着いてきた。
- ② 5 例中 3 人が一人っ子であった。保護者にとっては、おそらく兄弟喧嘩で仲裁した体験もないところに突然、発生した問題であり、かなりの狼狽ぶりだったと思われた。それだけに、学校側は人間関係の調整役をしなければならないのと、保護者にも成長して頂くことへの働きかけもしなければならない時代になったということを自覚していかなければならない。

#### 《今後の課題》

問題発生の原因は、5 例中 4 例は友達とのトラブルがきっかけとなっている。しかしその苦しい状況を把握できなかった、あるいはサインを出していたにもかかわらずわからずわかれようとしてくれなかった担任へ信頼喪失という形で向けられていた。このような状況から考えられることは、もう少しお互いを思いやり、分かり合えたら起きなかったことではないかと思えてならない。言い換えるとお互いが心の壁を作らない努力をしなければならない。担任と生徒、担任と保護者の壁を最初から作らない努力をしなければならないと考える。そのことは下記の 1) と 2) で林・岩野 2000<sup>(3)</sup> が提言してくれているように思える。

#### 1) 担任教師への提言

- ① 子供と時間を共有すること
- ② 遊び心を大切にすること
- ③ 人間としての生き方を語ること
- ④ しなやかな感性を磨くこと

#### 2) 親への提言

- ① 子供の個性を尊重すること
- ② 期待すること、されること
- ③ ゆとりを持って待つこと
- ④ 気持ちを理解し信じること

(筆者としての予防的対応)

#### 3) 生徒の初期サインを把握する保健室の役割

- ① 毎日の健康観察、欠席状況から
- ② 保健室頻り来室者の検討と継続的記録
- ③ 生徒や保護者からの相談

初期サインと思われることや生徒の健康問題と思われることについては、常に担任や学年と連携を取りながら間髪入れない対応が不可欠となってくる。

永瀬 2000<sup>(3)</sup> は養護教諭が積極的に教育相談、カウン

セリングの素養を身につけていくことが強く期待されていると述べている。生徒の健康問題や健康課題を居ながらにして把握できる格好の場所である保健室で、日々執務している。学校全体の動きも把握できる場所でもある。生徒の問題解決に向けて、学校職員と共感しながらしかも巻き込んでいくミドルリーダーとして活躍できる要素をもっている。

### V おわりに

生徒を深く認識し、生徒の良さをうまく生かすことで肯定感を高めることができた。さらには、全職員が心の壁を取り払うことができたことで生徒の将来に向けての解決策を見いだすことができた。

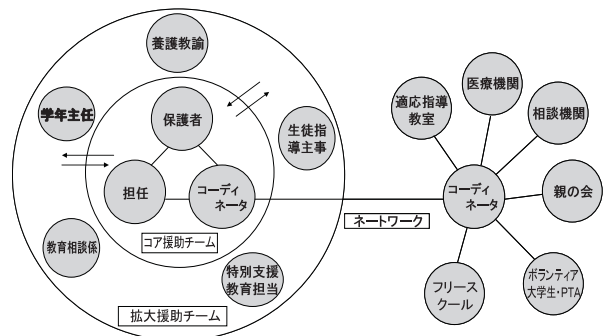


図5 コア援助チーム・拡大援助チーム・ネットワークから援助チーム (石隈・田村による) 2007<sup>(9)</sup>

故に、全職員の連携は生徒が教室復帰を遂げるためには不可欠であることを強調するものである。今こそ、教育界は図5のような外部の組織からの援助を受けながら、壁を低く、生徒の未来に貢献しなければならないという思いを保健室から積極的に発信することが重要と考える。

### 謝 辞

最後に、筆者はここに登場した5人の生徒から多くのことを学ばせてもらい、自身が一番成長したように思います。教育の原点ともいえる部分を学ばせていただき、5人の生徒とその保護者の方々に感謝いたします。また、別事例のスーパービジョンで適切な指導をいただいた、水上和夫先生にも感謝いたします。

### 文 献

- (1) 指導と評価「特集不登校」松田素行 日本図書文化協会 1997年
- (2) 「これからの養護教諭」富山県養護教諭研修会資料 岡田加奈子 2009年
- (3) 「学校カウンセリング」—その方法と実践— 真仁田昭編著 林 博, 岩野宣哉, 永瀬純三

- 金子書房 2000 年（初版第 5 刷）
- （4）「学校教育相談のすすめ方」学校教育経営研究会編  
岐阜県教育センター 笹島久・酒井元雄 教育出版  
1989 年
- （5）教育相談と保健室運営とのかかわり  
内地留学報告書 石若俊子 1990 年
- （6）教育カウンセラー標準テキスト 上級編  
「チーム援助」石隈利紀・田村節子  
日本教育カウンセラー協会編図書文化 2007 年（初

- 版第 5 刷）
- （7）家族療法 放送大学教科書 2004 年
- （8）教育カウンセラー標準テキスト 上級編  
「哲学概論」国分康孝  
日本教育カウンセラー協会編図書文化 2007 年（初  
版第 5 刷）
- （2009 年 8 月 31 日受付）  
（2009 年 11 月 6 日受理）